教導職試補　秋葉貞二　茨城縣
仝　篠崎秀助　仝　縣
仝　木村久治　仝　縣
仝　和田小吉　栃木縣
仝　廻谷德三郎　仝　縣
仝　竹内竹次郎　東京市
仝　森岡伊志　三重縣

雜錄

●演說摘要の天覽　我教管長の米國土產として宗教大會に列席せし世界各宗教家の演說大要を摘錄せしもの非賣品として上梓せしを兼て色紙表裝に製本し兩陛下乙夜の覽に供せんとて井上頼國氏の手をへて其向きへ願ひ出せし所宮內大臣より東宮亮足立氏へ宛て御前に差出されし旨御通報に相成り　東宮殿下よりも同樣御覽に相成る由承り及びぬ、附して曰ふ凡て活版物は容易に御受けなきよしなるを今早速に　天闕に達す管長の素志本教の光榮何を以てか之に加へん實に難有極みにこそ、

●獻品　兩陛下大婚滿廿五年御祝典を奉賀つる爲神皇教總理山崎天詳卿氏は自作の詩を絹地にしたゝめたる自筆の一軸を宮內省に獻せられたり左に詩を錄す

瑞雲靄々九重尊　遙誦關雎祝帝閣
綵伏霓旗出郊野　共欣德澤及黎元

●金婚の夫婦　長野小縣の人鎌倉仁平氏は妻秀子と結婚後滿五十年に當るとて夫婦相携へ東海道より京大坂四國の金比羅まで遊歷され歸途本館に立寄られたり管長翁の金婚を祝して左の一首を與へらる

黃金にも勝る子寶數あげて五十の契を先つ祝ふかな

●布教　埼玉縣人藤間六郎氏布教の爲山梨縣下へ出張の途中本館に立寄られたり同氏は管長歸途山梨甲府に於て大演說會を催すの準備に奔走中なりといふ

●管長惟一館開館式に臨まず　ユニテリアン派の新設に係る惟一館開館式に我管長臨場して一場の演說を爲す筈なりしが歸京の途次誤て車より落ち右手及び腰部を痛めしを以て懇篤なる招聘も謝絕するの已むを得ざるに至りしは遺憾なりし。

關東巡教摘錄

隨行員　田中塵外手記

春宵一刻價千金、吹く東風に誘はれて梅綻へば黃鳥早く春を告け、野に

山に和氣靄々、是時に當り我管長鞭を擧げて關東の野を跋渉せらる、余請ふて其尻馬に乘し隨行し巨細に各地の實況を報導するとは既に前號を以て諸彦に約せり、然りと雖も紙面に限りあり、又各地ともに至誠丹心を以て歡迎せらるゝ事とて今更取り立てゝ書き立つるの要なきが如し、されば爰には其大畧を摘錄し先約を履て先つ余が責を塞がん、

●出發　三月十三日晴時二州橋畔より例の通運丸に乘て下總國南部分局に向つて隅田川を利根に溯る、分局長蛭原藤十郎氏隨ふ船賓珠花に着し憩ふ茶店の澁茶一椀夜明しの咽に甘露の如く時正に午前七時、矢れより車を儵ふて大矢口に行くの途小山渡場にて出迎あり倉持與重氏に小憩し分局に着す、此日天候彌り上に晴朗、朧眼冴ゑかへり見渡す限り一面の青綠を布詰たらんか如き麥畠、見さゞる彼方は霞柳引ける筑波山、白皚々たる二荒足足拵も雲を衝く景色、紅塵千丈の東京を飛ひ出せし我等見る目殊に清し、

●總　三分局を一日宛にて常陸に入る、先つ十四日大矢口蛭原氏にて夜講を開き翌十五日香掛村木村氏に立寄一場の演說をなし夫れより二里許平藤分局野村氏に至る此日雨甚しく道路泥濘車夫大に苦しむ、余は毛布を被り脛を露はに跣足となり息もすた〳〵是れ修行の一なり、來り會するもの幾百人、さしもに廣き分局爪も立たず、余は宗教の攝取を題し一時間餘の長演說をなし了つて教謠一節をオルガンに合して唱ふあり、夫れより管長の米國土產談あり大喝采、十六日宿雨潺く晴れ來つて暖氣襯衣を脫かしむ、午前惟一社に原稿二三枚を送り書簡なを認む、午後出發女村へ休憩仁連分局栗田氏へ着せしは午后四時頃なりし、夜講又た盛會、管長の談話に聽衆宛なから醉へるか如く酒信徒は愈誠意を固め半信者は熱心耳を傾けたる本教の爲め賀すべきなり、十七日晴午前中管長書畫の揮毫あり午后一時腕車にて三里が程を走らせけれは午後三時半に

●常陸　桐ケ瀨村大里重三郎氏に迎へられ休憩數時教長須藤氏に着せり氏は頃日家作の普請を始め中々大仕掛なり、夜講、翌十八日大曾根村分局山中氏に行く行程五里餘は須藤氏と共に徒步して日暮に着す夜講を殘き畢つて明日出發の ケ所を談して寢ぬ、概して常陸は下總に比して教勢不振の姿なり、そは教長須藤氏病氣其他の事故あり外に熱心なる巡廻教師に乏しく加ふるに政熱傳染して競爭激烈なりしか爲なるも今後挽回振興するの見込なきにあられは心を用ゐて布教擴張の道を圖らん、明くれは三月十九日車を下舘に飛して瀛車に搭し

●下野　小山町に至り先つ豐田村大字小藥松沼萬吉氏に至れは社員既に山なし明日の皇靈祭を奉仕せんか爲め教長松本氏始め不圖管長の巡回に遭遇するの奇なるを喜ひ徹宵講演を開き翌二十日未明に盛なる祭典を執行す、此日有志者議して廿二日を期して宇都宮に大演說を開かんとを決す九時出發本澤村鵜養老を訪ふて部屋村神原氏に着せしは正午頃なりし、神原氏通運業にして近時入社せられし人なれとも能く本教を信して業務を勵まる當村元と田中作左衞門氏平井みか女など二三名に止まりしも田中氏の勤行みか女の篤行等非常に人を感せしめ近時勤行者の增加せしは難有事共なり夜講盛會にして椽板を踏折る、當村眞言寺住職川面某傍聽席にあり感慨の餘乎畢つて管長に面晤を請ふ、土宜法龍氏の末流なり、廿一日思川に船を泛へて古河に渡る聲を合せて教謠を唱ふ和氣洋々、古河町驕西屋小桑谷にて夜講一泊松枝文造氏能舞あり翌二十二日瀛車にて宇都宮に到れは出迎人數十、丸田源藏氏に休憩二荒神社に於て大演說會を催す盛會、了つて四時直に瀛車に乘し、小山村山口茂一郎氏の母公不歸の人となり其れが葬儀を營み午后五時式を畢へて直ちに車を飛はして多功村桑田力藏氏に一泊講筵を開き就寢せしは午前二時頃なりし此日非常の繁忙を究めたり、廿三日午前出立山王山海老原氏に立

寄り一席の說教を爲し芳賀郡古久保氏に着せしは午后四時頃なりし夜に入つて講演盛會此地に分局設置の議あり野州は全眞を通じて本教の勢力活氣ありと認む爾后布教に盡力し奬勵するの結果は必す大なるへし廿四日一ト先つ歸京し廿七日發して埼玉に向ふ　（以下次號）

●管長靜岡縣下巡回景況

隨行員　田中塵外報

春風駘蕩櫻花爛熳の好氣節に際し我教管長は關東巡教を了へ都の春を跡になし今や駿遠の野を跋渉す先つ駿東有渡庵原の二郡に向ひ到る處歡呼喝采の中に米國土產を分つ教長鈴木新五郎氏廣瀨令行氏横澤六太郎氏等熱心盡力せらる江尻町に於て大演說會を開きしに風雨を衝て來會せしもの數百夫より有名なる三保の松原鎭守御穗神社の祭典に會し祠官長澤氏の招聘を受けしも風雨の爲管長の臨場を得す余と廣瀨氏と行て演說す、翌十日靜岡市法月氏に一泊開講、十一日連日の陰雨悉く晴れ來つて暖又た加はる西部藤枝に向へは停車場には櫻井教長を始め神道實行教の大旗を押立て數十名の出迎へあり腕車を聯れて藤枝分局に着す休憩須臾にして社員は既に場中に充ちさしもに廣き教會所立錐の餘地なし正面に演壇を設け管長直垂を着し喝采聲理に米國宗教會の景況を報し我か神道實行教を世界に知らしめ日本國威を輝し　至尊の宸襟を安し奉りしも　單に天神の加護と諸君の精神とに依ると演へ了りし時は滿堂歡極つて涙を拂ふに及ふ華て懇親會を開き勝部に對ひしもの無慮百五十餘酒酣なるに及ひ廣瀨氏立て今日の盛會を嘉ひ合せて管長に代つて諸君の厚志を謝すと述へ夫れより教長の紹介を以て余は場の中央に起ちて一場の演說をなし神道擴張策の一助として機關雜誌の必要を感し微力なりと雖も諸君の贊助を得て將に第三號を發せんとす此の包まれたる明教即ち天眞の美玉を天下に表白發揮するの機失ふ可らすと演へ了りて幸に滿場の贊成を得たり夫れより各胸襟を披き談論激に渉らす酬酢亂に及はさるは眞に是れ本教の特性共に萬歲を唱へ散會せしは日既晡にならんとす、此日幹旋の勞を取られしは教長櫻井三竹氏伊東禎三氏池田彦兵衛氏等の諸氏なり、是れより志田益津の二郡始め遠江二國に歩を進む人心の最も收攬し難き本縣の如き之の盛會を見る余は本教の爲め歡嘉措く能はさる所なり、氣候は非常に暖く作物等關東各地に比するに半月の差あり、委細は次號に讓る、

●蓮門教

萬朝報連載十數日大に蓮門教の內事を發き、二六新聞次で攻擊を加ふ、或は高等地獄と呼ばれ、或は淫祠と名付られ、或は戀悶狂と稱せらる、其醜、其汚、苟も宗教として有可らざるの次第なり、今や府下の各新聞、爭ふて其非を罵る、我輩未だ早計に、彼新聞記載の事實を盡く信ずる者に非ざるも、烟の起る先づ火あるの後に然るを知る、

●天理教

天離教會も亦貂狸狂怪なり、妄りに大鼓をたゝいて、愚夫愚婦を瞞着し、無智矇昧を嚇惑すると傳ふ、今や識者其荒誕無稽に驚き、其風紀紊亂するを歎ず咄々、

●教主は女と馬引

既に妙法と唱ふるさえ、神道にはあるべからざる奇妙法なる、彼蓮門教の教主は、島村みつといへる婦人にて、教職は大教正なりと謂ふ、又其一對なる、天理教々祖（先頃死す）も大和國の婦人